

幼児期における「運動遊び」の取組について ——豊岡における運動遊びの成果と課題——

The Approach to Physical Play Activities in Early Childhood: Achievements and Challenges of Physical Play Activities in Toyooka

森本 良孝

Yoshitaka Morimoto

はじめに

文部科学省（2012）『幼児期運動指針』によると「幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の阻害に止まらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことになりかねない。このような状況を踏まえると、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全体の中に確保していくことは大きな課題である。」と述べている。このことをふまえ、本研究では、幼児期における運動遊び^{注1}について着目し、過去15年間の論文をレビューしながら、現状の課題を整理し、加えて17年間継続して運動遊びに取り組んでいる豊岡市の事例を取り上げその課題と対応について検討する。

幼児期における運動遊びの効用については、金¹⁾ら（2011）は、幼児期に体を動かし活動的に過ごしたことが、小学校入学後の学校や家庭での生活、健康や体力などに影響を及ぼすかどうかを検討する目的で、都内公立小学校2年生と5年生に、幼児期の運動にかかわる遊びの状況と現在の学校や家庭での生活、遊び、健康状態などについての質問紙調査を行っている。その結果、幼児期に身体活動が活発であった子どもたちは、小学校入学後の健康状態が良好である者が多く、幼児期の身体活動がその後の生活面に大きな影響を及ぼすことを報告している。具体的には、幼児期に身体活動が活発であった子どもは、そうでなかった子どもに比べ、体力テストが「高」得点の子どもが多く、結論として、子どもの成長に重要な部分を占めている幼児期に、子ども自身が運動遊びに興味を持ち、進んで身体活動を行うことが、小学校入学後も活発な生活を送り、健康や体力などにも

良い効果をもたらすとの報告もある。一方、杉原ら²⁾(2010)は、運動指導頻度の高い幼稚園のほうが有意に運動能力が低いという結果から、指導方法に問題があるのではないかとしており、また、森ら³⁾(2011)は、運動プログラムを実施している園と実施していない園における園児の運動能力を比較したところ、実施していない園の方が有意に高かったことを報告している。

幼児の運動意欲を高める運動遊びについて、村上ら⁴⁾(2018)は、幼稚園、保育園では独自に運動指導プログラムを組み実施しているところが増えているとしているが、吉田ら⁵⁾(2007)は、幼稚園での運動指導に関して、全国対象の運動能力測定を実施した幼稚園43園のうち、体育専門の外部等からの指導者が運動指導を行っている園が81.3%と多いもののその指導内容は種目を限定した技能向上を図ることが中心である傾向がみられたと報告している。そのため、幼児の運動遊びは増加傾向にあるものの、その指導方法に問題があるため、本来のねらいである健康や体力の向上に良い結果を及ぼしていない可能性が推察されると述べている。さらに、運動遊びを提供する保育者について、大木⁶⁾(2018)は、保育者が幼児の運動遊びの課題として最も多く挙げていたのは「園児の苦手意識」で次に「運動遊びの経験(生活体験)不足」「発達段階に応じた運動遊び」「遊びの内容・展開」「安全確保」「環境構成・整備」「運動能力の個人差」と指摘しており、子どもの発達段階に応じて、こういうことができるようになるためにはどう段階を踏んでいったらいいのかを保育者自身が理解して設定し、保育者の意図を明確にして援助していかなければならないといった保育者自身が運動遊びに対する知識を持つことが重要であると指摘している。調査結果の回答にもあるように保育者の意識によって幼児の運動遊びは変わってくるものと考えられる。保育者自身が幼児の運動遊びの現状から学び、個々の幼児の発達や興味等を考慮して幼児が楽しく意欲的に遊ぶことができる環境を整え、幼児と共に活動を楽しみながら援助の仕方も工夫をしていく必要性を理解することが重要であり、そのためには園内での活動の振り返りや情報の共有化を行うべきであると考察している。また、郡山ら⁷⁾(2016)は幼児が喜んで運動を継続するためには、レパートリーの多様さ、バリエーションの多様さ、教師や友達に認められたり親に褒められたり他者との関わりを持たせながら取り組ませていくことが必要であるとしている。すなわち、意図的に運動する環境を整え、バリエーションが豊富な多様な動きを常に提供するなどの仕掛けをすることによって、子どもたちは進んで運動し飽きずに継続するようになるとしている。さらに運動遊びを指導する指導者の意識について、苦手な園児への指導をどのようにしていくのか、さらに遊びの技術を教えるのではなく、そのプロセスを大切に、その子に寄り添った指導を保育者がいかにしていくかが課題であると指摘している。ところでこのような保育者の育成に働きかける存在として、巡回指導員としての「体育指導員」が挙げられる。岸本⁸⁾(2016)は、S市において、幼児期運動指針の認知度と、身体活動に関する保育活動についてアンケート調査を実施しているが、「運動遊びに対する保育者の認識」に影響を及ぼす取り組みとして、S市役所から派遣されている「体育指導員との連携」を挙げている。体育指導員は各幼稚園・保育所に年間約6回の巡回を実施しており、その中で実際に運動指導を実践し、保育者に対する研修も実施している。人を介して研修を実施し、保育者の意識を変化させることが有効な手立てであるとし、このことによって保育者の意識が変化し、保育の活動内容、保育者の言葉

掛けが変わり、子どもが変化するとしている。すなわち、運動遊びを継続して実施するにあたっては直接指導する職員の研修が必要であり、その役割を担っているのが体育指導員すなわち巡回指導員であるといえる。

【課 題】

以上これらの論文をレビューする中で、課題としてみえてきたことは以下の3点である。

1. 運動遊び等を通して体力の向上（運動能力の向上）が図られているのか。
2. 保育者がいかに園児に寄り添う形で運動遊びの指導を行えばよいのか。
3. 保育者の育成のためには、外部指導員とどのような形で連携すればよいのか。

この3点の課題を検討する上で、2007年度から運動遊びを取り入れ実践している豊岡市の取組について省察し、あわせて課題解決の方策に言及していく。研究方法としては、豊岡市教育委員会が発行している現在に至るまでの運動遊びについての冊子、運動遊び通信、運動遊びホームページ、教育委員会だより等を参考に検討すると共に、園を訪問し巡回指導を行っている職員（豊岡市教育委員会職員）からも聞き取りを行った。

【豊岡市における運動遊びの事例】

豊岡市における運動遊びは、2007年度から市内の全園で取り組んでいる。豊岡市発行の指導の手引⁹⁾によると「長野県の松本短期大学の柳澤秋孝教授が、子どもたちに身体を動かすことを好きになってもらいたいと自ら実践され、考案された体系的な運動プログラムです。子どもの発達段階や精神面を考慮し、無理なく楽しく体を動かすことにより、『動ける身体』をつくるとともに脳（特に前頭葉）を活性化させ、『こころ』の成長を促していくというものです。動きの最終目標としては①側転 ②跳箱の開脚跳超し ③短縄の連続跳び ④鉄棒の逆上がりの4つができるようになることを目指します。誰がみても『できる』『できない』がはっきりわかる種目だからこそ、できたことにより達成感が生まれ、『すごいね〜』と褒められることにより、さらに自信が付き、意欲がわきます。これらのことが“身体を動かすことは『楽しい』『好き』”だという気持ちへとつながっていきます。柳沢運動プログラムをもとに、クマさん歩き、ワニさん歩きやカンガルー跳びなど、いろいろな動物に変身したり、身体を使ったゲームなどを行ったりして楽しく遊びながら、日常生活ではあまり使われない筋肉を動かし、支持力、跳躍力、懸垂力や回転・逆さ感覚などの基礎体力を身につけていきます。」と述べている。

豊岡市の事例からみた運動遊び等を通した体力の向上（運動能力の向上）

豊岡市では、全園で実施している運動遊びが子どもたちの体力向上（運動能力の向上）につながっているかを検証するため、「運動遊びを経験した子どもと経験していない子どもの比較調査¹⁰⁾」を2011年に実施している。

対象は市内の小学校1年生である。その結果、「平成17年度～平成19年度の幼児期の運動遊び事業を経験していない小学校1年生と平成20年度～平成24年度の経験した小学校1年生の体力テストを比較すると、16種目中12種目が向上していた。」豊岡市教育委員会は、「この結果からは全国及び県との相対的評価に関しては一概に判断しにくい状況ではあるが、市内小学校1年生での個人内評価では、体力テスト結果は向上傾向にあることが推察できる。」と報告している。さらに、豊岡市では、2015年から幼児期の運動遊びを小学校へつなげる取組として、豊岡市版小学校体育準備運動を取り入れ、現在も実践している。導入の経緯については、豊岡市教育委員会は「運動遊びを通して体力の向上傾向にあることが推察できる。しかし、小学校の現状をみると運動する子どもとそうでない子どもの二極化が見られる。また、低学年から高学年まで、系統的・継続的に実践されるべき授業内容が各学年において断片的になっている現状がある。そこで『幼児期の運動遊びの要素』を取り入れた継続的な運動の実践や系統性・継続性のある週3時間の体育の実施などが考えられる。これらの現状と課題をふまえ、すべての子どもたちが生涯にわたって生き生きと輝くために必要となる“からだの力”を高めるため、幼児期の運動遊びの要素を取り入れ、十分な活動量を確保するとともに、共通した動き・意識のポイントなどをまとめた豊岡市版小学校体育準備運動を実践していく¹¹⁾。」と述べている。これらの一連の取組の成果を検証するため、豊岡市では2019年、「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果（対象は市内小学校5年生、中学校2年生）」を分析し、運動遊び等の効果を検証している。その結果、「体力合計点が小学校5年生と中学校2年生の男・女すべてで全国平均を上回る結果となった。特に小学校5年女子の体力合計点は過去最高得点を記録している。この年齢の対象者は、園での運動遊び（3～5歳）や小学校での豊岡市版小学校体育準備運動を継続して取り組んできた児童・生徒である¹²⁾。」また、調査の中で「運動やスポーツを行って楽しいと感じたときの問いに『友達に褒められた時』と回答した子どもの割合は国や県の値を上回っており、『体育の授業でできなかったことができるようになったきっかけ』については『友達に教えてもらった』『先生に個別に教えてもらった』と回答した子どもが5割を超えていた。このような調査結果から運動遊びや豊岡市版小学校体育準備運動の継続した取り組みによって、体力の向上、運動する楽しさ、できる喜びを高め、自らの力を伸ばしている子どもたちの姿が見えてきている¹³⁾。」と豊岡市教育委員会では分析している。また、運動遊びを経験した園児が、小学校での豊岡市版小学校体育準備運動を体験し、中学校となるにつれて運動能力が向上していることも報告されている。さらに長期的な観点からの分析では、「2013年から2022年度の豊岡市・全国・県の体力合計点の推移から、豊岡市の子ども達の体力合計点は、小学5年生と中学2年生の男女すべてで全国と県の平均をほぼ継続して上回る結果となっている。運動の機会や内容などが確実に引き継がれ、地道に継続してきた取り組みが、子どもたちの体力向上、運動能力の底上げにつながっている¹⁴⁾。」と報告している。これらのことから、運動遊びが子どもの運動能力の向上におおいに役立っていることがわかる。なおこれら一連の取り組みは、2017年に告示された『幼稚園教育要領』（文部科学省）「幼児の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）において、幼児教育において育まれた姿は、その後の小学校教育へとつながっていくものとし、小学校との接続の活用を示している。豊岡市の事例

をみると、運動遊びを通して、幼稚園教育と小学校教育との接続がより円滑になっている。また、園児、児童のみならず、小学校の教諭と園の職員とが運動遊びや豊岡市版小学校体育準備運動でつながることにより子どもの様子を語る場として、お互いの発見にもつながり、子ども達の能力をどのように高めていくのかを考える機会にもなっている。

豊岡市の事例からみた運動遊びを指導する保育者（職員）の意識

「運動遊びを実際に指導する保育者の意識¹⁵⁾」については、豊岡市では2011年度に職員を対象としたアンケートを実施している。(実施時期・2011年2月下旬、調査園・市内6保育園・5幼稚園、合計11園、回収数・職員228名)

職員アンケート回答結果によると、

○運動遊びに取り組むことによって、体を動かして遊ぶことが好きな子どもが増えたと思う。

- ・非常にそう思う 22.8%・そう思う 65.4% (合計88.2%)
- ・どちらでもない 9.6%・あまり思わない 0.4%・全く思わない 1.8%

○運動遊びに取り組むことによって、子ども達が遊具等に触れる機会を意図的に多くするようになった。

- ・回答あり 77.2%・回答なし 22.8%

○運動遊びに取り組むことによって、動的な遊びが生活習慣の一部となるような機会を設定するようになった。(もしくは、以前から設定していた。)

- ・非常にそう思う 18.9%・そう思う 62.3% (合計81.2%)
- ・どちらでもない 9.6%・あまり思わない 0.4%・無回答 8.8%

○自由記載欄から

- ・運動遊びという体を動かすことを行うように心掛けるようになって、子ども達も体を動かすことを楽しんで行うようになったように思います。1日の中で短時間でも続けていくことは、大変な面があるかもしれませんが、無理のないように続けていくことが大切だと感じました。
- ・クラス担任の運動遊び設定保育、その後の話し合い等、可能な限り職員が参加し、意見交換をさせていただきました。とても大切なことだと思います。全職員が理解する事は大事であり様々な先生方の意見・指導を聞くことも良いことだと思います。
- ・普段は人前に出ることが少ない子が「上手にできた」と皆の前で披露させてもらえたことが、とても良かったです。運動遊びを行うことで、自分自身が楽しんで体を動かす機会を設けていこうと思います。
- ・園ではカリキュラムを立て、系統的に運動遊びをしています。また、個々の発達状況を踏まえて関わっていくことも大切にしています。その中で感じることは、保育園に入ってくるまでにあまりにも経験していない子が多い事です。保幼小で今まで以上に力を入れていただくことをお願いしたいのですが、一方で健診等で、体を動かすことの大切さ、そのやり方、四肢の運動方法など、お母さん、おばあちゃんなどに指導していただけると、より運動遊びがいかされるのではないかと思います。

・跳び箱、鉄棒等に親しむ姿が、ずい分身近に感じられるようになり、継続の大切さや効果を感じる。しかし、園や学校によっても、取組に開きを感じるのも現状であり、～中略～園や学校や職員それぞれの気持ちで子ども達が変わる事を意識する事が大切である。

職員からの自由記述等からみえてきたものは、①園児のみならず職員も楽しんで体を動かしていること ②できない子どもへの配慮 ③他園の意見を聞く機会、研修の重要性 ④家庭での運動遊びの推進についての記述が多くみられた。豊岡市においては、外部指導員に全てを任せてしまうのではなく、担当が運動遊びを直接指導する態勢をとっている。そのことによって、園児の実態や運動状況を把握することもでき、直接、指導にいかすことができている。また「様々な先生方の意見・指導を聞くことも良いことだと思います」といった記述から、運動遊びの場が職員の指導力を高める「研修の場」にもなっていることがわかる。また、実践している園との意見交流等を行うことにより、豊岡市の園全体の運動遊び等の充実と職員の意識の高まりが期待できる。

豊岡市の事例からみた外部指導員の役割等

豊岡市の外部指導員は、市の職員であり、園を所管する教育委員会に所属している。筆者が、巡回指導を担当している職員に聞き取りをした結果、以下のとおりであった。

「運動遊び事業で最も大切にしているポイントについて」は、3点を挙げている。

1. 笑顔でほめてふれあう、2. 小さな「できた」を見逃さない、3. 友達と一緒に一人一人のよいところをみんなに紹介する。この3点を巡回指導で大切にしながら指導する職員にも伝え、実践に移してもらっているとのことであった。「運動遊びが苦手な子どもの指導」については、「得意、不得意」はあるが「好きか嫌い」は保育者の関わりによって随分かわるのではないかと考え、「運動は苦手、でも、体を動かして遊ぶのは大好き」「運動遊び、大好き」と思ったり感じたりしてくれるような言葉がけや支援を行っているとの回答が得られた。杉本ら¹⁶⁾(2022)は保育者のほめ言葉を通して幼児は重要な他者である保育者の受容・共感や承認からの受容感を獲得し、幼児の関係性や運動に対する内発的動機づけに影響を受けていたとの調査報告もある。

園への巡回訪問は、市立園については基本的に年間4回訪問し、運動遊びの直接指導と職員への研修が行われている。また、全市立小学校へ年1回訪問し、1年生対象の運動遊びや小学校版体育準備運動が行われている。また、その際には短時間ではあるが、小学校1年生担任との意見交流会も設けられている。これらのことから、豊岡市における運動遊びが成果をあげているのは、指導員の役割がおおきいものと考えられる。運動遊びの直接指導のみならず、「苦手な園児の対応」「職員への指導」、さらには運動遊びを通して、「園児への寄り添い方」「支援の仕方」「声のかけ方」等も運動遊びを指導する中で、職員が指導員から学びとっている。このことは、研修会という形式にとられずとも、職員にとって自分の指導力を高めていく研修の場となっていることがうかがわれる。すなわち、指導員の巡回訪問を通して学んだことが日ごろの園児への指導へと還元されているといえる。

【今後の課題】

幼児期における運動遊びについて着目し、過去15年間の論文をレビューし、豊岡市の事例を取り上げる中でさらに、今後の課題として以下の3点が浮き彫りとなった。まず、1点目は、「巡回指導員によるコーディネート」である。豊岡市の運動遊びについては、運動能力の向上、指導する職員の指導力の向上、さらに豊岡市小学校体育準備運動等、好循環なサイクルができあがっている。そして、これをコーディネートしているのは巡回指導員である。このことにより、すべての園での運動遊びの質が担保されているが、一方で長期間、この形を継続していくことは、マンネリ化につながる恐れがあると考えられる。そのため、巡回訪問を通して、もう一度運動遊びの基本に立ち返るとともに、子どもたちの見方や寄り添い方を職員に伝え、この循環サイクルを今後もつづけていくためのさらなる取り組みが必要と考えられ、このことが運動遊びの質の向上につながるといえる。次に2点目は、「観察法に基づく非認知能力の検証」についてである。非認知能力については、豊岡市の取り組みとして、「子どもたちに非認知能力を！非認知能力も伸びる豊岡市運動遊び事業」をテーマに令和2年度より取り組んでいる。豊岡市運動遊び事業ホームページ¹⁷⁾では、「非認知能力はこんな場面で発揮されている」とし園児の運動遊びの一場面を取り上げ次のように解説している。

・鉄棒で前回り降りに挑戦、一人で前回りしてみるの？すごいね！意欲的である、やり抜く力がある、小さな失敗を恐れない。・手押し車に挑戦、力を合わせて頑張っているね。すごいよ！誰とでも仲良くできる、体を動かしても疲れにくい。

このように運動遊びは、園児たちの非認知能力の様子を観察できる場でもあり、その力を伸ばす場ともなりうる。非認知能力については、2017年に告示された『幼稚園教育要領』（文部科学省）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿をあげているうちの②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活とのかかわりが特に深く関わっている。今後、運動遊びにおいて、指導者のどのような言葉かけや寄り添い方が、非認知能力を伸ばしているのか客観的に分析することができれば、運動遊びの質をさらに高め、園児の非認知能力を高めていくことにつながると考えられる。そして、3点目は「家庭での運動遊びについて」である。調査から得られた保護者の感想の中に家庭で運動遊びを行っている保護者もいる。そのため、家庭での運動遊びが適切になされるように、現在行っている通信等での家庭での運動遊びの様子を伝達するのみならず、豊岡市運動遊び事業ホームページで動画を公開するなど、家庭でも情報を受け取り、より身近に運動遊びができる環境を構築できるようにすることが重要であると考えられる。また、このような取り組みは、単に体力の向上のみならず、子どもに対する言葉かけ、寄り添い方等、運動遊びを通して、親子が触れ合う中で子どもが自尊感情を高めることにもつながると考えられ、さらには、運動遊びをとおして園と家庭とがつながり、「やりぬく力、自分に対する自信、小さな失敗をおそれない」などの相乗効果が期待できる。

【まとめ】

本研究では過去15年間の運動遊び（運動遊びをキーワードとしたグーグルスコラでの検索）についての論文でレビューしたところ3点の課題が明らかになった。そこで豊岡市の事例をもとに課題の現状を検討した。その結果については、運動遊びを通して体力の向上が確認でき、指導する保育者の意識についても子どもに寄り添った指導ができていたことがわかった。さらに外部指導員の役割等がより明らかになった。

幼児期の運動遊びを効果的に実施するための多くの示唆が得られた。今後は、体力・運動能力調査結果の対象を市内の高校生まで延長し、分析・検討すると共に幼児期に体験した運動遊びについての定量的な観点での分析を行うことにより社会性やコミュニケーション能力等への研究も深めていきたい。また、豊岡市出身で現在活躍しているスポーツ選手（運動遊び体験者）について、示唆をいただく中で、幅広い観点から幼児における運動遊びをとらえ分析し現場への指導等に寄与していきたい。

引用文献

- 1) 金 美珍・小林正子・中村 泉. (2011). 幼児期の運動や運動遊びの経験が学童期の子どもの生活・健康・体力に及ぼす影響. 日本小児保健協会機関誌『小児保健研究』, **70**, 658-668.
(<https://www.jschild.med-all.net/Contents/private/cx3child/2011/007005/012/0658-0668.pdf>) (2023年6月19日20時10分)
- 2) 杉原 隆・吉田伊都美・森 司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中元浩揮・近藤充夫. (2010). 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係. 体育の科学, **60** (5), 342-343.
- 3) 森 司朗・杉原 隆・吉田伊都美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮. (2011). 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入. 平成20-22年度文部科学省科学研究費(基礎研究B) 研究報告書, **20**.
(<http://youji-undou.nifs-k.ac.jp/images/exam/20300204.pdf>) (2023年5月5日20時30分)
- 4) 村上咲子・筒井茂喜. (2018). 幼児の運動意欲を高める運動遊びに関する考察. 大阪体育学研究, **57**, 55-67.
(https://www.osaka-taiikugakkai.jp/journal/vol57/57_murakami_55-67.pdf) (2023年5月8日21時21分)
- 5) 吉田伊都美・杉原 隆・森 司朗. (2007). 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, **58**, 75-80.
(<http://altmetrics.ceek.jp/article/hdl.handle.net/2309/65460>) (2023年5月11日22時30分)
- 6) 大木みどり. (2018). 幼児期の運動遊びの実態と課題－保育者が指導・援助する上での課題. 羽陽学園短期大学紀要, **10**, 395-406.
(<https://uyo.repo.nii.ac.jp/records/304>) (2023年5月25日5時21分)
- 7) 郡山孝幸・針生 弘・久能和夫・金 賢植・柴田千賀子. (2016). 幼児からの運動遊び充実の重要性についての一考察－広島市幼稚園及び仙台市立富沢小学校における取り組みの事例から－. 仙台大学紀要, **47**, 67-75.
(<https://sendai-u.repo.nii.ac.jp/records/999>) (2023年6月1日18時30分)

- 8) 岸本みさ子. (2016). S市立幼稚園・保育所における運動遊びプログラム内容の検討. 千里金蘭大学紀要, 13, 175-178.
〈https://kinran.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&pn=1&count=20&order=16&lang=japanese&creator=%E5%B2%B8%E6%9C%AC+%E3%81%BF%E3%81%95%E5%AD%90&page_id=13&block_id=21〉 (2023年6月10日17時21分)
- 9) 豊岡市教育委員会こども育成課. (2012). 兵庫県豊岡市運動遊び事業・指導の手引 (p70).
- 10) 兵庫県豊岡市教育委員会. (2015). 豊岡市版小学校体育準備運動の実践とそのポイント, p3.
- 11) 兵庫県豊岡市教育委員会. (2015). 豊岡市版小学校体育準備運動の実践とそのポイント, p4.
- 12) 豊岡市運動遊び事業ホームページ. 豊岡の子どもたちの体力合計点が全国の平均値を上回っています. 更新日令和4年12月15日.
〈<https://www.city.toyooka.lg.jp/undou/undoukoka/1011728.html>〉 (2023年6月19日18時40分)
- 13) 豊岡市教育委員会. (2020). 教育委員会だより. 豊岡きょういく. 2020. 6月20日発行
- 14) 豊岡市運動遊び事業ホームページ. 豊岡の子どもたちの体力合計点が全国の平均値を上回っています. 更新日令和5年2月14日.
〈<https://www.city.toyooka.lg.jp/undou/undoukoka/1011728.html>〉 (2023年6月25日21時40分)
- 15) 豊岡市教育委員会こども育成課. (2012). 兵庫県豊岡市運動遊び事業・指導の手引 (p85).
- 16) 杉本 信・森 司朗. (2022). 保育者のほめ言葉が幼児の運動に対する内発的動機づけに影響するプロセス：関係性欲求に着目して. 帝京科学大学教育・教職研究, 7, 73-83.
〈<https://tust.repo.nii.ac.jp/records/857>〉 (2023年11月22日21時30分)
- 17) 豊岡市運動遊び事業ホームページ. 運動遊び事業で大切にしていること、してきたこと. 更新日令和2年3月6日. 子どもたちに非認知能力を～非認知能力も伸びる豊岡市運動遊び事業～.
〈<https://www.city.toyooka.lg.jp/undou/1009379.html>〉 (2023年7月1日20時40分)

注 釈

注1)「幼児期における運動遊び」については定義がないため幼児期において身体運動を伴う活動を運動遊びととらえた。

